

事件から数ヶ月のち、神立が病死したとの報と手記が4人の元に届いた。

“

わすれもしないあの雨の日
たしかに自分は許されないことをした
しかし院長を殺したのは自分ではない
はんにんはあの4人の誰かだろう、自分にも動機はあった
かこから続く恨みはあったが心を鎮め耐えていたのだ
みにくい自分を神は許すだろうか
二言など許されない立場の人間が
みにくく言い訳をしたためているなど…
はんにんは誰だったのだろう
なぜ自分が犯人にされてしまったのだろう
さもありなん、などと納得出来るほど自分は出来た人間ではない
れんごくの炎がみえる、自分を待っている
ただ、ただ生きていたかっただけなのに

”

すぐに釈放されるだろうという犯人の思惑叶わず、動機が重視され逮捕。
神立の手記が届いてのち、ほどなくして自白文と共に1人の遺体が発見される。
望まぬ雨ほど雷を連れ、いつも急にやってくる。

あめかんむり 突然の雷雨

—end—